高津区おはなしアーカイブ

●村田　昭二　（むらた　しょうじ）さん

昭和２年生まれ　９０歳
川崎市高津区溝口在住

◆ご家族のこと

生まれた時からずっとここで暮らしています。両親と姉、私、弟の５人家族でした。姉は１７年前に、弟は１０年前に亡くなりました。

家は米屋でした。米屋をやる前には、うどん屋をやっていたと聞いています。まあ、農家でしたから、乾麺かなにか作ってたんでしょう。

かつて米は配給制度でしたからね。食料配給公団っていうのがあったんです。特に戦後は、配給される量が世帯の人数に合わせられ、大人と子どもで配給される量が違うんです。役人の監査もよくありました。厳しかったですよ。米が足りないときは芋で代用されたこともありました。ニシンや砂糖なんかも配給されてました。戦後、しばらくしてその公団が解散して米屋が始まったんです。

米屋は私が三代目でしたが、１０年前にやめちゃいました。今はもうスーパーだの大型店なんかで売ってますからねえ。

◆小学校のころ

小学校は高津尋常小学校でした。校門を入ったら真正面に奉安殿（天皇と皇后の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物）があって登校したらまず最敬礼していましたね。空襲などまだなかった時代だから勉強は普通にできていました。先生は師範学校を出ているから、質の高い方ばかりでしたよ。また、途中から国民学校と名前が変わったり、日本光学の工場と社員寮ができた影響で小学校の人数が増えて、授業が２部制になったりもしました。戦争が終わると日本光学の跡地は東芝や洗足学園などに変わっていきましたけどね。

学校から帰ったら近所の子どもたちとよく遊んでいましたね。コマ回しやかくれんぼ、それに兵隊ごっこね。七面山っていうお寺の山がいい遊び場だったなあ。

女の子はお手玉とかやってましたね。男女が一緒に遊ぶことはあまりなかったですね。

そのころ着ていたのは洋服でした。着物の人もいましたが大半は洋服でした。履物

はズック靴。ちゃんとゴム底の靴ね。終戦の頃はいろいろ物が手に入らなかったりしたけど、私が小学校の頃は戦争していたわけじゃないから何も不自由してませんでしたよ。

小学校の頃からずっと白米を食べていました。おやつなんてものは特別なかったけど、小麦粉を練って茹でてそれを甘辛くしたの、スイトンみたいなもんだね。お腹もふくれるし美味しいしね。そういうのを食べてましたね。お餅を刻んで焼いたり揚げたりした煎餅とかね。あとは農家が多かったから、お芋をふかしたのやトウモロコシなんかを食べていましたね。

◆中学から予科練へ

中学校は府立第一商業学校に行きました。現在は東京都立第一商業高等学校という名前になっていますがね。

中学を卒業する少し前に予科練（旧日本海軍の海軍飛行予科練習生の略称）に行くことになりました。昭和１８年、１６歳の時ですね。親元を離れるのが寂しいなんて、そんなことは考えたこともなかったです。皆ね、お国のために戦うんだって、そういう志で志願していくんだからね。徴兵は私たちの年が最後だったんじゃなかったかね。私は長男で跡取り息子だったから、それでもいいのかと聞かれましたが、弟がいたから大丈夫ってことでね。

予科練では、まず最初は藤沢航空隊に行って、それから四国の松山に移りまして、その後は、佐世保のほうにある大村海軍航空隊にずっといて、ここで終戦を迎えました。

第三四三海軍航空隊司令の源田實（みのる）という、ハワイ、ミッドウェー海戦の時に航空参謀だった方ですが、その方の元で指導を受けておりました。源田司令には終戦後もずっとお世話になりましてね、子どもの仲人までしていただいたんですよ。

源田司令の著書

予科練っていったって軍隊ですからね、朝は６時に起床ラッパが鳴って整列してね、体を鍛え、技術を鍛えですよ。

私たちは航空機には乗れなくて、敵機がどこにいるかを探る電波探知機を操作したりしてました。通称「デンタン」と呼んでいました。それから航空電話で操縦士とやりとりしたりね。そういう訓練をしましたね。だから戦地に赴いて敵と相まみえるってことはなかったです。出陣できたのは私の一年上の人まででしたね。

上官に殴られるなんてことは、そんなになかったですよ。ただね、研修生のときは

皆「バッタ」を喰らってました。バットじゃなくて、バッタっていうの。このくらいの木の棒で、野球のバットみたいなね。今日は気合が入ってなくてダメだぞ！っていう時にはその棒でね、こうやって壁に手をついてお尻を出すの。その時に、うまくお尻をぶってくれりゃあいいんだけど、ちょっと外れて腿のほうに当たると痛いの。

バッタを喰らうポーズ

バッタ喰らうとあざができちゃうからね、それで風呂にいくと皆にばれちゃうんだ。（笑）

航空の予科練は食事がよくてね、白米が出されてましたね。おかずも何品かついてね。

◆原子爆弾そして終戦

８月９日、長崎がやられたでしょう？大村と長崎は３キロくらいで近いからね、私たち、原子雲、見たんですよ。その時、空襲警報が鳴ってたんで壕に入ってたんです。すると信号兵が「おい、見ろ！」って言って、出てみたら原子雲がね、ぶわーっと上がってた。

その日から３日目だったかな、予備学生と一緒に佐世保の鎮守府に用があって行ったんです。諫早で乗り換えたんです。そうするともう、長崎のほうから……パンツひとつで、こんな小さい子がねぇ、焼けた体に新聞紙を貼って…気息奄々でねえ…。顔中包帯の人とか…。長崎のほうから逃れてきたんですねえ…。

終戦で隊が解散になったときもね、帰郷の途中で広島を通ったんだけどね、それがもう、本当にひどかった。駅の周り、まるっきりなんにもないの。煙突が立ってるだけ。他は全部焼け野原。もう、何もない。…そんなね、体験をね、しましたよ。

◆帰郷

予科練は終戦になって（昭和２０年８月１５日）わりとすぐに解散になりました。２５日か２６日でしたかね。備蓄されていた食料を皆で分けて持ち帰っていいと言われ、牛缶をいくつかいただきました。

汽車で、横浜まで帰ってきたら終電が出た後だったんで、横浜駅で一晩過ごして翌朝帰ってきました。

その時この家はね、強制疎開させられてましてね。二ヶ領用水から現在の大山街道ふるさと館の場所にあった隣の役所のところまでは敵に狙われるかもしれないってことでね、強制疎開です。

この表通りの建物はね、５月５日に皆壊されちゃったって聞きました。家族は二子のほうで暮らしてましたんで、そちらに帰りました。

予科練はいったん解散して、後の整理のためでしょうか、再度集合の呼びかけがあったらしいんです。でも私はそれを知らなかったので行ってません。

強制疎開で壊された店もぼちぼちと元に戻ってきましたけど、駅の向こう側に大型店ができたからねえ、こっち側は寂しくなってしまいました。

駅の所にあった「ヤストモ」ってマーケットは、終戦後に傷痍軍人の働き場を作るために始めたと聞きましたね。

駅周辺の再開発でこの町はずいぶん変わりました。

◆お正月やお祭りのこと

お正月はお雑煮で祝って、お節料理は重箱に詰めました。瀬戸の丸い重箱を使っていました。料理は自宅で作っていたし、数日分作っていたので、女性は大変でしたね。そんなに堅苦しいことはしないけれどね。

お寺や神社のお祭りは最近の方が賑やかになっています。私が子どもの頃はお祭りより、むしろ夜店のほうが楽しみでした。一年を通して、溝口は７の日、二子は２の日って開催日が決まっていました。大福などのお菓子やちょっとしたオモチャを売っているんです。お菓子なんて普段は食べられなくて、夜店で大福を買うのをとても楽しみにしていました。

奥様からもたくさんお話を伺いました

◆自然の様子

この辺は自然がいっぱいでしたよ。二ヶ領用水があるでしょう？今みたいに護岸などなくて、もっと曲がりくねっていてね、綺麗で眺めも良くて、生き物もいっぱいいました。カワウソがいたし、ホタルもいた。シジミが採れた。魚もいましたよ。多摩川ではアユ、二ヶ領ではハヤがよく釣れたね。モクゾウガニっていう蟹も獲れて、これが肉もカニミソもおいしいんだよ。

子どものころは多摩川や二ヶ領で泳いだもんです。学校の裏を歩いていくと桃畑があってね。畑になっている桃を頂戴して、川の水で冷やして食べちゃった。誰も怒ったりしなかったですよ。この辺だってすぐ裏をみりゃあ畑だったんだ。野菜は全部自家製だったよ。レンゲがよく咲いていて女の子が摘んで遊んでたなあ。

◆大山街道

この通りね、一般に「大山街道」って呼んでるけれど、以前は「大山道（おおやまみち）」っていったみたいですね。でも本当の名前は「矢倉沢往還（やぐらざわおうかん）」と言うんですよ。この先に通る大井松田のほうに矢倉沢っていう山があるんです。そこからこの名前がついたんでしょうね。

この道は裏街道なんですよ。東海道の脇往還で、この道を通ると箱根を通らなくてすむんです。この道だと大山を抜けて三島にいける。だから少し遠いけど楽な道なんです。昔は大山街道の辺りが一番賑わっていました。

私は歴史に興味があるもんで、最近はこの辺りの歴史を調べたり、先祖を遡って調べたりして、楽しんで暮らしていますよ。

（平成２９年８月７日取材）